

第2章 各教科等における学習評価

10(2) 中学校 外国語

単元(題材)における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは外国語科における学習指導目標や内容、学習指導要領解説等を踏まえ、指導と評価を行うことが大切である。具体的には、以下のような関連性を確認することが重要である。

	目標	学習評価
外国語科 ↓	<資質・能力の三つの柱> ・知識及び技能 ・思考力、判断力、表現力等 ・学びに向かう力、人間性等	<三観点> ・知識・技能 ・思考・判断・表現 ・主体的に学習に取り組む態度
英語 ↓	<五つの領域(=「内容のまとまり」)別の目標> * 一文ずつの能力記述文で示されている。	<三観点> ・知識・技能 ・思考・判断・表現 ・主体的に学習に取り組む態度
↓ 学年 ↓	・各学校で設定(外国語科の目標及び<五つの領域(=「内容のまとまり」)別の目標>に基づいて設定すること。) ・一文ずつの能力記述文で示すことが基本形である。ただし、<五つの領域(=「内容のまとまり」)別の目標>にある「ア」「イ」「ウ」ごとに設定することも考えられる。 * 「CAN-DO リスト形式」の学習到達目標として、多くの学校ですでに作成及び活用されている。	・各学校で評価規準を設定(「学年ごとの目標」に対応させ、三観点で記述する)
↓ 単元	・各学校で設定(学年ごとの目標を踏まえて設定すること。)	・各学校で評価規準を設定(単元ごとの目標を踏まえて設定すること。)

五つの領域別に作成

ここで、第3学年の「話すこと [やり取り]」における学年目標とその評価規準を例として示す。

学年目標	日常的な話題や社会的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
[知識] 学習した言語材料の特徴やきまりを理解している。 [技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的话题や社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、事実や自分の考え、気持ちなどを簡単な語句や文を用いて伝え合う技能を身に付けている。	コミュニケーションを行う目的・場面・状況などに応じて、日常的话题や社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて伝え合っている。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、話し手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてやり取りしようとしている。	

* 外国語科においては、「内容のまとまり」は五つの領域のことである。

* 単元ごとの目標及び評価規準は、各単元で取り扱う題材、言語の特徴や決まりに関する事項(言語材料)、当該単元を中心とする言語活動において設定するコミュニケーションを行う目的・場面・状況、取り扱う話題などに即して設定することになる。以上の関連性を考慮しながら、単元ごとの目標及び評価規準を設定していく。

この第3学年の「話すこと [やり取り]」における学年目標と評価規準を踏まえ、

第3学年 1学期 「話すこと [やり取り]」

単元（題材）名：「読んだことについて、事実や自分の考え、気持ちなどを伝え合う」

を例として、その評価例を示す。以下に示す例は、第3学年の1学期で、教科書の3つの単元を1つの単元として、扱うことを想定している。

① 単元（題材）の目標を作成する

以下のような手順で、単元（題材）の目標を設定することができる。

まず、「五つの領域別の学年ごとの目標」と本単元とのかかわりを確認する。

「五つの領域別の学年ごとの目標」：第3学年「話すこと [やり取り]」の目標 ＊ 前述済み



第3学年 1学期における3つの単元を通した目標

「日常な話題や社会的な話題（野菜の歴史、世界遺産、リサイクルなど）について書かれた文章を読み、読んだことを基に考えたことや感じたこと、その理由などを伝え合うことができる。」

＊ このように、3つの単元を通した目標を設定するのではなく、学習到達目標における第3学年1学期で育てたい「話すこと [やり取り] の能力」などを確認してもよい。



単元1の目標 ＊ 単元2及び単元3は省略

「友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想を書きまとめるために、野菜の歴史について書かれた英文を読み、読んだことを基に考えたことや感じたことを、英文を引用したり内容に言及したりしながら伝え合うことができる。」

② 単元（題材）の評価規準を作成する

「知識・技能」の評価規準の設定の仕方

- ・ <知識><技能>の2つに分けて記述する。<知識>は、中学校学習指導要領「外国語」p.130「2内容」の〔知識及び技能〕における「(1) 英語の特徴やきまりに関する事項」に示されていること。
- ・ <知識>は、「～理解している」、<技能>は、「～を身に付けている」が基本形となる。
- ・ <知識>は言語材料の明記をし、<技能>は、言語材料の明記に加え、「事柄・話題」「内容」「書かれた文等」などを明記するのが基本となる。

「思考・判断・表現」の評価規準の設定の仕方

- ・ 「知識・技能」とは、目的や場面、状況の設定がある点で異なる。その際には、学習指導要領に記載されている「言語の使用場面の例」や「言語の働きの例」を踏まえること。
- ・ 文末は、「伝え合っている」「書いている」等、英語を使って何ができるかを示す。
- ・ 内容のまとまりごとに、「目的等」「事柄・話題」「内容」等の構成要素がある。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準の設定の仕方

- ・ 「思考・判断・表現」の記述の文末を、「～しようとしている」とするのが基本形となる。それは、「思考・判断・表現」と一体的に評価することを原則としているためである。
- ・ 本観点のみを取り出しての評価は行わない。さらに、学習活動を通して身に付けた態度を評価するため、単元の導入時に評価したり、単位時間の授業の冒頭で評価したりすることは適切ではない。

「① 単元（題材）の目標を作成する」で作成した単元1の目標を踏まえて、次のように、単元1の評価規準を作成する。なお、3つの単元を通した目標を設定する場合、指導と評価を一体的に行う観点から、評価規準を設定することが基本となる。また、実際の指導と評価に当たっては、「読むこと」や「書くこと」などの評価規準も設定することが考えられる。

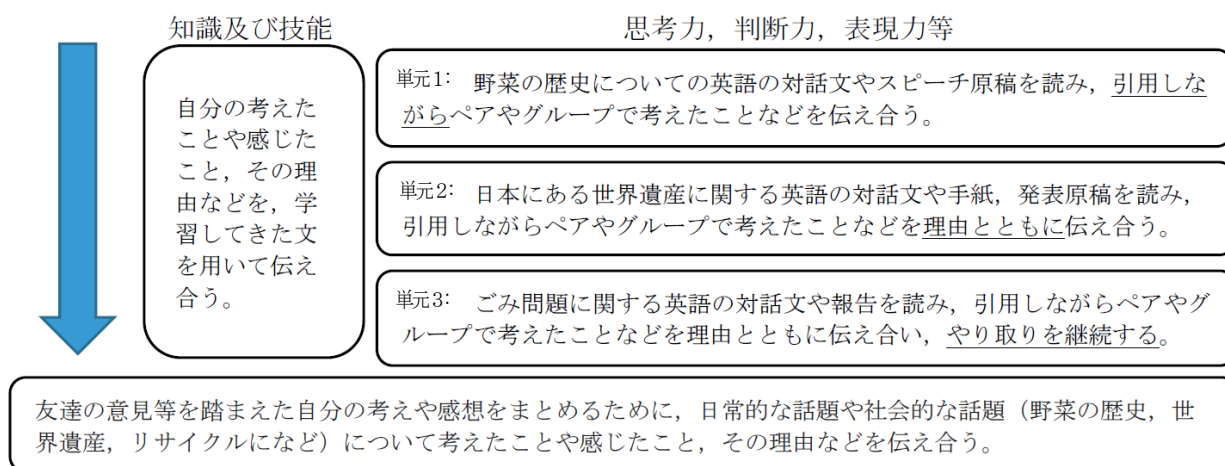
例として、ここでは単元1の目標と評価規準を示しているが、単元2と単元3については、扱う言語材料と話題等が変わるが、他の部分の書きぶりは単元1と同様と考える。

単元1の評価規準 「話すこと [やり取り]」		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
[知識] 受け身や現在完了形の特徴やきまり、引用するための表現を理解している。 [技能] 野菜の歴史について、考えたことや感じたことなどを、受け身や現在完了形などを用いて伝え合う技能を身に付けている。	友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想をまとめるために、社会的な話題（野菜の歴史）に関して読んだことについて、考えたことや感じたことなどを、英文を引用するなどして伝え合っている。	友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想をまとめるために、社会的な話題（野菜の歴史）に関して読んだことについて、考えたことや感じたことなどを、英文を引用するなどして伝え合おうとしている。

* これらはいくまで例示であり、より重点化したり、より端的に記載したりすることも考えられる。目標に照らして観点別の評価を行う上で必要な要素が盛り込まれていれば、語順や記載の仕方等は必ずしもこの例示の通りである必要はない。

③ 指導と評価の計画を作成する

本事例では、単元1から単元3を通して、指導することとしており、各単元は下図のような関連性を持っている。



次に、単元1の指導と評価の計画を示す。表中の「○」が付されている時間は、極力全員の学習状況を記録に残すよう努めるが、確実に全員分の記録を残すのは学期末のパフォーマンステスト及びペーパーテストの機会とする。なお、○が付されていない授業においても、生徒の学習状況を確認することは重要である。その確認結果は単元や学期末の評価を総括する際に参考にすることができる。

時間	ねらい	知	思	態	備考
1	・単元の目標を理解する。				・文で表現させる。 ・Small Talk 等でも、パフォーマンステストを意識した指導を行う。
2	・教科書の対話文やレポート、文章などを読み、引用するなどしながら、考えたことや感じたことなどを伝え合う。				
3					
4					
5					
6					
7	・教師やALTに、教科書の本文内容について説明する。	○			注1
8	・初見の文章を読み、引用などして、感想を伝え合う。	○	○	○	注2、本日の評価に加え、後日パフォーマンステストを実施

注1

- ・教師は1回につき4人（2ペア）を観察し、「知識・技能」の評価規準に関して、受け身や現在完了形を使用しなくてはならない文脈で用いることができるかを観察する。

注2

- ・初見の文章を読み、読んだことについて、引用するなどしながら考えたことや感じたことなどをペアで3分程度伝え合う。その後、ペアを複数回変え、やり取りをさせる。
- ・教師は1回につき、4人（2ペア）を観察し、本課の評価規準（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」）に照らして評価する。十分な発話がない生徒がいた場合には、新しいペアにおけるやり取りを観察する。
- ・第8時の観察の結果を本単元の評価情報として極力記録に残すようにする。「知識・技能」の評価については、現在完了形や受け身の使用がみられなかった場合、第7時の観察の結果を加味することが考えられる。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については第8時だけに限らず日々の授業における言語活動への取組状況を勧奨する。

④ 実際の指導及び評価

単元ごとに、極力全員の学習状況を記録に残すようにするが、学期の終末において、ペーパーテストやパフォーマンステストを実施し、各単元の結果を踏まえながら、三観点で評価を行うことが想定される。例とした本単元においても、3つの単元を通して育成された資質・能力を1学期終末に、「話すこと[やり取り]」に関する評価として、パフォーマンステストを実施することとしている。次に、そのパフォーマンステストの実際について説明する。

<内容>

「AIの進歩と私たちの生活」（以下「AIの進歩等」という。）に関する記事（article）を読み、読んだことに基づいて考えたことや感じたこと、その理由などを伝え合う。

<準備する課題>

次の指示文が印刷された用紙を準備しテスト前に配付する。

「AIの進歩と私たちの生活」というテーマについて、友だちの意見等を踏まえた自分の意見や感想を伝え合うことになりました。そこで、下の記事 [Article about AI] の内容に基づいてペアでやり取りをしてください。読む時間は3分です。

[Article about AI]

People have created a lot of things throughout history.
 These days, AI robots are used in some areas of our daily lives. AI products have changed our lives and will change ones in the future, too. It is easy for us to get better lives with AI.
 There are already some AI products around us, and new one will be made. For example, an AI fridge will be made in the near future. The fridge will tell us what to cook with the food in it.
 AI will change our lives so much in the future.

<採点の基準>

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
a	誤りのない正しい英文で話すことができる。	「b」に加えて、自分の考えなどの詳細を話したり、様々な視点から質問したりしている。	「b」に加えて、自分の考えなどの詳細を話したり、様々な視点から質問したりしようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・「思考・判断・表現」については、単元で指導してきたことを踏まえ、①②③の3つの条件を全て満たしていれば「b」としている。 ・他に①②③全て満たした際には、「a」とするなど、達成した個数で判断することも考えられる。 ・音声に関することも「知識・技能」の基準にできる。
b	誤りが一部あるが、コミュニケーションに支障のない程度の英文を用いて話すことができる。	Kenのレポートを読んで、①英文を引用するなどしながら、②AIの進歩等について考えたことや感じたことその理由などを話したり、③相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続させている。	Kenのレポートを読んで、①英文を引用するなどしながら、②AIの進歩等について考えたことや感じたことその理由などを話したり、③相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続させようとしている。	
c	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない	

<採点の結果>

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
Student A	a	b	b
	正しい英文で話すことができていた。	条件①②③を満たしていた。	条件①②③を踏まえてやり取りしようとしていた。
Student B	b	c	b
	誤りがあるがコミュニケーションに支障のない程度の英文で話すことができていた。	条件の①②は満たしているが、条件の③は満たしていなかった。	質問することはできなかったが、しようとする状況はみられた。
Student C	b	a	a
	誤りがあるがコミュニケーションに支障のない程度の英文で話すことができていた。	条件①②③を満たしていた上に、別の視点から自分の考えと理由を話していた。	条件①②③を満たしている上に、別の視点から自分の考えと理由を話そうとしていた。
Student D	c	c	c
	英文で話すことができていなかった。	条件②を踏まえた発話だったが、他の条件を満たせていなかった。	条件①と③を踏まえた発話をしようとしていなかった。

テストの結果を踏まえて、生徒自身が学習の調整をできるように、以下のような指導を行う。

- ・生徒一人一人に、それぞれの観点の評価結果を示し、できるようになったことを認める。その上で、自分自身で成果や課題を明らかにさせ、次の単元に向けた目標をもたせる。
- ・パフォーマンステスト中にみられた各観点の「a」または「b」の発話をいくつか示し、引用している部分や自分の考えなどを理由とともに話している部分に下線を引かせる。そのことにより、どのような発話をするとういかに改めて自覚できるようにする。

＊ このような指導の結果、課題を修正しようとしたかどうかを、後日（学年末等）に振り返らせる。そのことにより、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に活用することも考えられる。

⑤ 観点ごとに評価を総括する

Student A 及び Student B を例に、これらの生徒の単元1から単元3までを合わせた単元の終末における活動の観察の結果が以下であった場合の総括の考え方について示す。

Student A

Student B

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元1の結果	b	c	c	b	c	c
単元2の結果	b	c	c	a	b	b
単元3の結果	b	b	b	b	b	b
パフォーマンステストの結果	a	b	b	b	c	b
総括	a	b	b	b	b	b

＊ 単元1から単元3へ学習を行うにしたがっていずれの観点についても向上がみられることに鑑み、各観点の評価をそれぞれ「a」「b」「b」と総括している。

＊ 「知識・技能」については、2課で「a」であったものの、3課を通じて概ね「b」でありパフォーマンステストでも「b」であったことから「b」と総括している。「思考・判断・表現」については、パフォーマンステストでは「c」であった一方で、単元1から単元3へ学習を行うにしたがって「c→b」という向上がみられることに鑑み「b」と総括している。「主体的に学習に取り組む態度」は、「思考・判断・表現」と一体的に評価するという考え方及び日々の授業における言語活動への取組状況を勘案し「b」と総括している。

参考として、各単元等で評価した各領域の評価結果を、観点別評価に総括する方法の例を以下に示す。なお、ここで示すのは学年末に指導要録における観点別評価に総括する方法であるが、ここで示す考え方は、各学期で総括する際に活用することができる。また、ここで示しているのは、評価方法の一例であり、必ずしもこの通りの方法でなければならないわけではない。

(例)

	ペーパーテスト等の結果 (活動の観察の結果を加味)		パフォーマンステストの結果 (活動の観察やペーパーテスト等の結果を加味)			観点別 評価	評定
	聞くこと	読むこと	話すこと [やり取り]	話すこと [発表]	書くこと		
知識・技能	b	b	c	c	b	B	3
思考・判断・ 表現	b	b	c	b	c	B	
主体的に学習に 取り組む態度	b	b	b	b	c	B	

自己評価(振り返りの記述内容)を参考

「知識・技能」

・「b、b、c、c、b」となっていることから、「b」と「c」の数の比率に鑑み、「B」と総括している。なお、学期単位で総括する場合であれば、当該学期で重点を置いて指導した領域の結果を重視して総括するという方法も考えられる。

例えば「話すこと [やり取り]」及び「話すこと [発表]」に重点を置いて指導したのであれば、これらの領域の「c」という結果を踏まえ「C」と総括することが考えられる。なお、重点を置いて指導した領域の結果を重視するという考え方は、他の観点においても同様である。

「思考・判断・表現」

・「b、b、c、b、c」となっているため、数の比率を踏まえると「B」と総括することが考えられるとともに、授業における言語活動の観察の結果を加味し「B」と判断することが妥当と考え「B」と総括している。

「主体的に学習に取り組む態度」

・「b、b、b、b、c」となっているため、数の比率から「B」と総括している。

※ 「ペーパーテスト等」とは、ペーパーテスト（期末テストや単元テスト等）の他、ワークシートを指す。

※ 評価情報（表中のbやc）は、従来の評価の方法同様、主に三つの方法（ペーパーテスト等、パフォーマンステスト、活動の観察）から得ることができる。

※ 学期単位で総括する際は、全ての評価情報を得ることができない場合が考えられる。ただし、学年末に総括する際には、全ての評価情報が得られていることが必要である。

<参考資料>

『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料(小学校、中学校) (国立教育政策研究所)